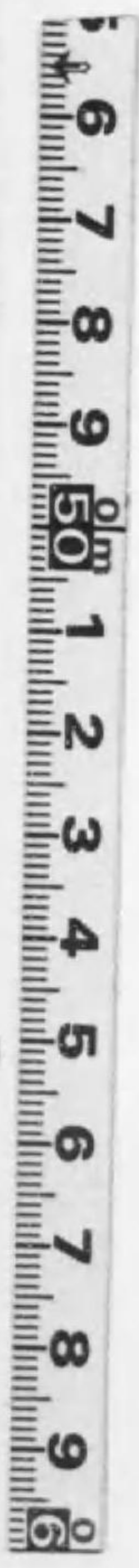


特116  
780

信仰乃奇蹟



始



持116  
780

はしがき

一 この冊子は、私が過去十数年の間の、信仰生活中に體驗いたしました、さまざまの奇蹟を書き綴つたものでございます。

私は、その奇蹟を、洵に不思議な事柄だと考へてをりますが、しかし、かうした奇蹟は、熱心な信仰者にとつては、決して不思議な出来事ではない、と云ふことをも考へてをります。

私は、世の中に信仰の力ほど強いものはないと考へてをります。それは、人間の感情が人間の中で一番尊いからでございます。まして、心からなる信仰は、想像も出来ないやうな不思議な力を生むのでございます。

一 この冊子は、さうした熱烈な信仰者へは勿論、これから、信仰の道に心がけられるあまたのお方に、精進奉仕の道伴れとしてお頒ちしたいと考へてをります。

大正  
12.12.20  
内交

一 この四五年以來、我國には種々な思想が唱へられてまゐりました。人の心はそのいづれに進んでよいか、大變に迷つてゐるやうに見受けられます。これから益々繁榮して行かなければならない我國に、宗教が衰へ、思想が亂れてをりますことは、實に悲しむべきことではございませんか。

一 私は、近頃の狀態を見るにつけ、女ながらも心配に堪へないものでございます。それで、寔に微力ではございますが、私の體驗いたしました態々な信仰の力によりまして、及ばすながらも、お國に竭したいと決心いたしました次第でございます。

一 この冊子を、若し縁あつてお読み下さいますならば、たゞ奇蹟と云ふことばかりでなく、いかに信仰の力が、人の心を清く美しく正しく和らげるものであるか、と云ふことを、お汲みとり願ひたいのでございます。

一 私が、この冊子を書き綴つてをります中に、關東は今迄にない

大震災に襲はれまして、東京横濱はこの世からなる焦熱地獄に陥りました。人々の不安は絶頂に達してをります。

一 私は、この冊子が、右のやうな重ね々の秋に出来上りましたことを、いかにも神明のおしろめしのやうに感じました。また、私の志を試めす何よりの時節でもあるやうに考へてをります。私は、一刻も早く、神の思召による私の勤を盡さなければなりません。

大正十二年九月東京にて



著者像

### 信仰の奇蹟に就て

私の出生地は巖手縣でございますが、私の幼ひ頃ほひ折悪しく家運が傾いてまゐりましたので、その回復の目的で仙臺に轉住することになりました。

私は元來幼ひ頃から非常に信心好きでございまして、郷里にをります時分は、私の家の者は勿論、近所近邊のお方にまで、子供に不似合な信心者とか、不思議な生れつきだとか申されまして、全く變り者扱ひにされてまゐつたのでございませう。

しかし、追々成長いたしますにつれては、たゞ／＼信心好きと云ふだけでなく、竊に立正大師日蓮上人を信仰いたしまして、只管上人のお徳を慕ひまゐらせたのでございませう。

仙臺に轉住いたしました時分は、私も恰度娘時分でございましたが、前にも申し上げましたやうに、家運回復のために故郷を去らな

ければならないやうな家庭でございましたから、勿論人知れぬ苦勞を嘗めたのでございます。

しかし、この苦勞は却て私の信仰心を一層熱烈にいたしました。それですれ、このために私の幼い頃からの信仰を、些しも挫くやうなことはございませんでした。逆境になれば逆境になるほど、憂い辛いことが増せば増すだけ、私の志す信仰の光明は益々不斷に燃え盛つたのでございます。

次に申し上げます種々な奇蹟談は、私が仙臺に轉住いたしましたから、更に北海道の旭川に轉住いたしましたして、それから今日に至る迄、凡そ十餘年の間に起りました。私の信仰生活中忘るゝことの出來ない尊い體驗でございます。

これに就て一寸申し上げて置きたいと思ひますのは、凡そかうした奇蹟と云ふやうな事柄は、兎角普通の心持では判断の難しいことでございます。それで信仰に御經驗のないお方は、或はそんな不思議

議なことがあるものではない、と仰せになるかも知れませんが、私がかうした信仰に御經驗のないお方には、先づ信仰生活を御經驗になつて頂きたいと考へてをります。さうして、その御經驗の積んだ時分に御説明申し上げて、晩くはないと考へてゐる次第でございます。

昔から、『鱒の頭も信心から』と申す言葉がございます。まことになんでもないやうな文句でございますが、これを今少し深く考へてまゐりますと、そこには千萬無量の味ひが含まれてゐるのでございます。心の持ち方一つでは、綿も襪襪に見えませうし、鱒の頭にも御光が射してまゐつたりするのでございます。また、これも俗に申しますことでございますが、『一心岩をも通す』と云ふ言葉や、『虫が知らせる』と云ふ言葉などは、いかに人間の心持が靈妙不可思議であるかと云ふことを證據立てゝゐるやうに考へます。

實際、かうした人間の微妙な心の働き方は、決して今日の學問で

説明したり、または機械で測つたりすることが出来るものではございません。その證據には、人と人とが頭と頭とを突き合はして、一分も隙のないようにそれこそピッタリとくつつけ合はしてみましても、相手の人がどんなことを考へてゐるか、また自分を殺さうと考へてをりましたも、それは夢にも判るものではございません。

ですから、よくあることでございますが、最愛の子供で遠く離れて思はぬ死に方をいたしました時など、その母親などがよくその子供の歸つてきた靈感を受けまして、不思議に思ひながらもその子供の名を呼んで、表戸を開けて待つたりするのでございます。これなどは、その母親だけが感じたことでございまして、側の者から見ますれば全く不思議と申すより外にないのでございまして、母親の受けました靈感は、事實に違ひないのでございます。

これと同じやうに、信仰の極致も矢張りその人自身の體驗に過ぎませんから、その人以外のお方には殆んど判断の出来ないやうなこ

と許りでございます。まして宗教心のない、信仰生活に經驗のないお方などは、もとよりお判りになる譯はないのでございます。が、しかし、どんなお方でも、一生の中には一度や二度は、必ず不思議なことにお出會ひになりますから、その時には始めて、人間の心が、杓子定規でおしはかることのできないもの、人間の感情は自由自在に千變萬化するもの、と云ふことがお判りになることゝ存じます。

これだけ申し上げて置きますれば、たとえ御信仰の經驗のないお方でも、廣い世の中には奇蹟とか、廻り合せとか、因縁とか、申しますものが、絶対にないとは仰せにならぬとだらうと考へます。それにつけても、私達の住んでをります世の中は、殆んど私達の想像の出来ないほど廣大無邊なものでございます。人の心さへ判り兼ねますのに、このはかり知れない世の中の不思議を、たゞ譯もなく打ち消さうといたしますことは、なんと云ふ怖ろしいことでござ

いませう。「至誠神に通ず」と申す言葉もございませうが、人の誠、即ち眞心より強いものはございませぬ。信仰に精進いたしましたてあらゆる邪念を拭ひ去りました時、そこには鐵をも溶かすやうな熱い眞心が湧き出でてまゐります。さうしてその眞心が神の御心へ融け合ひましたところに、常寂光明の妙境が拓かれるのでございませぬ。勿論、さうした場合には、奇蹟も奇瑞も、奇縁も不思議も、待たずして現はれてくるのでございませぬ。どうか、そのお心組で、言葉以外に意味のありますところを、充分お汲みとりの上で、お読み下さいませうにお願いいたす次第でございませぬ。

### 奇蹟の事實談

家運回復のために、仙臺に轉住いたしました私達は、とりあへず北材木町と云ふ所に暫く居を定めることになりました。ところが、恰度私達の引越してまゐりました家の筋向に、春日明神と申すお宮があつたのでございませぬ。もちろん同町内でございませぬが、何時の頃から參詣人が打ち絶えたのでございませぬ、お社は見る影もなく荒れ果て、頑是ない近所の子供より外に、誰れ一人訪れるものもなく、たゞ雨風に曝された儘でございませぬ。

私は前に申し上げましたやうに、幼い頃から非常に信仰好きのところへ、かやうに生れ故郷を離れて他國に轉住しなければならぬやうな境遇になりましたので、この頃から一層信仰に厚くなりまして、悲しいこと、辛いこと、すべて信仰の力で打ち消さうと心掛け



てゐたやうな次第でございます。そこへ引越勿々、近所へお社のあ  
ることに心づきましたから、信仰一圖な私は、たゞ／＼勿體ないこ  
とに考へまして、近くにあるのを幸に、朝夕閑を見ては参拜に出掛  
けたのでございます。その中追々日數が経つてまゐります中に、た  
だ／＼信仰一圖に参詣いたしてをりました私も、御神殿の寂れかた  
が餘りに酷いのと、私より他にそれこそ誰れ一人もお詣りに見へる  
方がございませんので、なんだか不思議な神様だと云ふやうに考へ  
られてまゐりました。併し、引越して間もないことでございますか  
ら、一切事情が判りませんので、心に懸りながらもその儘にお詣り  
を缺がさずに續けてゐましたやうな次第でございます。

ところが、それからまた暫くいたしました或る日のことでござい  
ます。同じ仙臺の元荒町に八百屋店を出してゐられる知り合の方が  
お見へになりました。四方山の話の末に、

『あなたは全くお苦いにも不似合な御信心ですが、それに就て、今

不圖思ひ出したことがございます。それは私の家に先年或る人から  
妙な譯合から御神像をお預りしたことでございます。サア今何處に  
藏ひ込んでございますか、一寸思ひ出せませんが、前々から私など  
の家に置いては勿體ないと許り思つてゐましたから、折角あなたの  
御信心を幸に、その御神像をお譲りしたいと思ひますが、如何でこ  
ざいませう。』

と、云ふ話が出ました。それで私も、

『それはなにより結構なことで、若しお差聞へがなければ、明日に  
でもお伺して、御一緒に探させて頂きませう。』

と、申し上げますと、お婆さんは非常に欣ばれまして、そこで明日  
のことをお約束いたしました。

さて、その翌日、約束通り元荒町のお婆さんをお訪ねいたしまし  
て、一緒に家中を探してをりますと、平素すこしも用のない戸棚の  
奥になんだか古い新聞紙に包んだ、高さ一尺近いものがございますし

たので、若しやと思つて披いて見ますと、立派な御神像が傷しや御足を片方失はれて、埃塗れになつて出てまゐられました。そこで、早速御足を探し始めましたが、どういたしましたものか、その日は終りに探し出すことが出来ませんでした。

翌日重ねてお訪ねいたしました。またく戸棚や押入の隅を探してをりますと、昨日種々と探しました戸棚の隅から、不思議に出てまゐつたのでございます。

それでとりあえず御神像と御足を頂戴いたしましたして、私の家にお遷しいたしますと共に、金工に頼みまして御足を接ぎ合せ、早速お厨子を新調いたしましたしてとかくも神棚へとお祀りすることが出来たのでございます。

ところが、それから毎日朝夕の禮拜をいたしてをりますと、その御神像の前に跪いてをります間、どう云ふものか心が騒ぎ立ち、その御神像には餘程の御利徳が備へられてゐて、しかも言ふに言はれ

ぬ由緒が纏つてゐるやうに考へられるのでございます。それが毎日朝夕の禮拜に森々と胸に應へてまゐりますので、私もこれには何か深い仔細が偲んでゐるのではないかと考へ始めまして、それから種々と心當りを尋ねましたり、人手を頼んで問合せてをりますと、實になんと申す奇縁でございませう、イエなんと云ふあらたかな御靈驗でございませう、その御神像こそ、實に實に、私が仙臺に引越してまゐりましたから、毎日のように參拜いたしてをりました、すぐ筋向ひの、あの荒れ果てた、お詣りする人は殆んど私一人でありました、春日明神の御神體であつたのでございます。

そこで、種々と春日明神のお話を承りますと、その御神體は凡そ二十何年か前に紛失いたしましたもので、これには種々な物語がございませう、その略を申し上げますと、

春日明神は以前は立派な社領もあつたのでございますが、種々な事情からその社領が個人の手に渡りまして、その人がまた或る興行

師に賣渡したのでございます。するとその興行師の方は、自分の買った土地の中にあるものは自分のものだと言ふ譯で、折角御神殿の中に安置してありました御神像を、勝手に持ち出しまして、疎そかにも自分の家の床の間の飾物にいたしたのでございます。

ところが、神罰と申しませうか、その御神像を勝手に持出しましてから間もなく火事を起して、丸裸に焼け出されたのでございませう。そこで流石の興行師も神罰に心づきましたものか、火事の中から漸く御神像を取り出しまして、知り合の人に預けて了つたのでございます。それから御神像は種々な人の手に渡り、その興行師も終に破産して行衛不明になりましたが、二十何年目かに偶然八百屋のお婆さんから、思ひがけもなく私の許に廻り廻つてきたのでございます。

右の事情を始めて聞き知りました時は、全く夢かとはかりに驚きました。しかし、よくよく考へて見ますと、誰れも願みるものも

なかつた春日明神に、不思議な御縁とは申しながら、引越したその日からお詣りをいたしてをりました私に、屹度明神の御加護が手傳つて、終に私の手許までお戻りになるやうになつたのではないかと思はれてまゐりましたので、今更のやうに朝夕に感じた禮拜の心騒ぎが思ひ出されました。その尊い御靈驗に心からの信仰を捧げるやうになつたのでございます。

しかし、かうして事情が判つてみますれば、何時までも私の家の神棚に祀つておく譯にまゐりませんから、早速町内の古い氏子の方方に御相談いたしましたして、種々と準備を整へ、大正三年六月七日夜午の刻を期して、愈々昔の御神殿に御奉還いたしました。

……寫眞御參照……



この寫眞は大正三  
年六月七日に二十  
餘年目で發見され  
た御神體を元の御  
神殿に御奉遷する  
ために町内の氏子  
の方々と恭しく御  
移してゐるところ  
でございます。

それから恰度一年程経ちました翌年の大正四年の五月九日のこと  
でございます。この日は昔から春日明神の例祭日に當つてをります  
ので、御神體の御還りになつた始めての例祭として、久振りに立派  
な祭典が営まれることになりました。それで私も心許りに赤飯を炊  
きまして、それを御神前にお供へいたしました。



さて、その日の祭典も無事に終りましたから、夕刻神宮の方から  
お供へものゝお下りを頂戴いたしました。夕餉の膳につきますと、  
家内中のもは皆その赤飯を美味しく頂きましたが、どういたしま  
したものか、私だけは不思議なところ、赤飯がどうしても皆頂けないのでござい  
ます。それでこれは不思議なことであると思ひながら、つひ思はず  
一口だけ皿に残しましたところ、なんと云ふ奇蹟でございませふ、  
その一口の赤飯の上に、それこそ夢にも知らぬ間に、目も綾に一面  
の優曇華の花が咲き亂れたのでございます。餘りに不思議な出来事

にあり合せの植木鉢を持ってまゐりまして、その中に綿を詰め、その上に赤飯を乗せまして寫真に撮つてをきました。

…寫真御参照…



この寫眞は大正  
四年五月九日御  
神體を御奉還し  
てから始めての  
春日明神の御例  
祭當日に、不思  
議な靈感から思  
はず食ひ残した  
赤飯の上に何時  
ともなく吹き亂  
れた優曇華の花  
でございます。

◇  
御神體を御奉還いたしましたして第一年度の始めての例祭に、思ひがけなくも私のお供へした赤飯の上に見事な優曇華の花が咲きましたので、なによりその奇瑞に驚きました次第でございますが、不圖私は今迄の奇しき因縁から、或は春日明神が何事かの御靈驗をお示しになるものでないかと考へましたので、早速近隣の方々にこの奇蹟をお話いたしますと、近所のお方の一人が、

『それは偶然咲いたもので、奇蹟でもありません、若しあなたが言はれるように、それに神意がお宿りになつてゐるものとするれば、今一度赤飯をお供へになつても、それに再び優曇華の花が咲かなくてはなりません』

と、申されるのでございます。しかし、私はなんとなく胸騒ぎがいたしましたして、二度お供へしても屹度咲くやうに思はれてなりませんから、



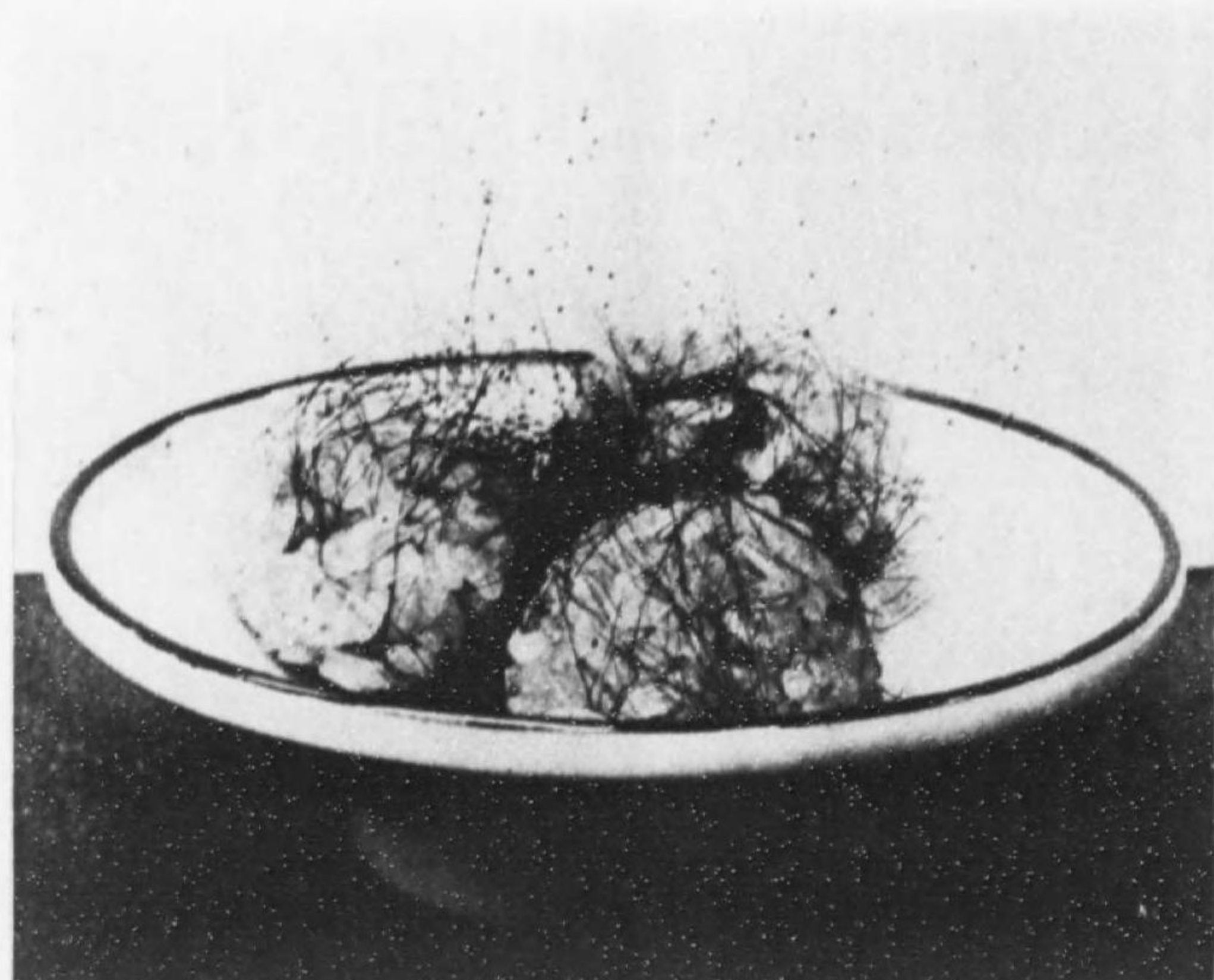
「それでは、一つ皆様に證人になつて頂いて、今一度お供へいたしてみませう」

と、申し上げまして、特に四五人のお方に證人に立つて頂きまして、大正四年の六月一日、例祭がありましてから二十三日までございましたが、心許りの赤飯を炊きましてお供へいたしますと、それから七日目の六月七日の朝、私の胸に電のやうな靈感がありますと、いかゞでございませう、二度と再びその赤飯の上に、疑ふ方もない優曇華の花が、それこそ一面に咲き亂れたのでございます。

そこで、早速近隣の方々にお話しいたしますと、この時ばかりは立派に立會て頂いたのでございますから、聲を挙げて驚嘆されたのでございます、私もとく／＼心には感じてをりながら半信半疑でございましたから、皆様と御一緒にこの有様を眺めました時には、全く胸の塞がるやうな驚きに打たれたのでございます。それに、この六月七日は、恰度一年前に御神體を御奉還いたしましたその日と、年

こそ變れ同じ月の同じ日でございますましたので、いかにも奇蹟として尊い御靈驗、思はず感激の聲を放たずにはゐられなかつたのでございます。この頃はすでに私の信仰も一心不亂の境にございましたが、このことがありまして以來、私の信仰は一層の力を得まして、精進潔淨只管春日御神の御靈驗にお縋り申すやうになつたのでございます。

……寫眞御參照……



この寫眞は大正四年六月七日の奇蹟を確める爲に懸々近所の方四五人に證人になつて頂いてつくつたお探飯の上に咲いた優曇華の花でございます。またこの日は實に一年前に御體を御奉還した當日にあつてゐたのでございます。

其後、と申しましても、矢張り大正四年のことでございますが、また家計の都合から北海道の旭川に轉住するやうになりました。しかし、前に申し上げましたやうな次第で、全く不思議な機縁から春日御神を信心いたしますやうになりましたので、旭川に引越しましても、早速神棚にお移りを祀りまして、前よりも一層一生懸命に、信仰を續けてまゐりました。

この頃から私の信仰は殆んど極度に高調いたしましたして、春日明神の御靈驗にあやかり、また幼い頃から信仰いたしてをりました日蓮上人の御利益をもつて、私の身體はいかなる難行を積んでも、それは決して私の健康を害ふものでなく、却て私の信仰を清く尊く堅固にするものであると考へましたので、先づ一日の十七時間を絶食いたしましたして、食事は一日一回だけ攝ることいたしました。さうしてこの願行を、大正四年から今年即ち十二年の一月まで續けてまゐ

りました。また今年の一月からは一日の半分、即ち十二時間を絶食  
いたしました。更に毎月一週間宛一食も攝らない絶食の七日間をさ  
し挟みまして、只今まで引き續き實行いたしてをりますが、信仰の  
力と申しませうか、私の身體には些しの苦痛もございません。それ  
のみならず、若し御病人のお方がお出でになりました。その御病氣  
をお癒しするためには、何時でも絶食してお禱りするのでございま  
すが、いかに絶食をいたしましても、私の健康、それこそ露ほども  
變ることはございません。それどころかこの難行のために却て思ひ  
通りの心願が届くのでございます。

それから一寸お話しが前後いたしますが、前の十七時間の絶食の  
時のことでございます。心が澄んでまゐりますと、時に靈感が私の  
腦中を掠めまして、知合のお方の病氣の模様や、また事業の成否や、  
選挙の當落などが、不意に私の胸に浮び出るのでございます。それ  
で私も不思議に考へまして、試に私の心の中だけでその成行を注意

してをりますと、それこそ驚くほど當つてゐるのでございます。

また大正六年の八月一日から、同年の十一月十三日迄の百四日間、  
七年も同じく八月一日から十一月十三日迄の百四日間、八年も九年  
も同じやうに百四日間と、一切穀断ちをして信仰に精進いたしまし  
たことがございます。この時のことでございますが、穀断ちを始め  
ましてから恰度三日目に、非常に氣持が悪くなりました。胸が苦し  
くて堪りませんから、どうしたことかと案じてをりますと、急に嘔  
吐を催しました。それで驚いて汚物を取り片附けようといたします  
と、洵に汚いお話してございますが、その汚物の中に不圖一粒のお  
米が混つてゐるのを發見いたしました。嘔いて終ひますと氣持の悪  
いのは癒りましたが、穀断ちをいたしてをりながら、何かの間違ひ  
で米粒が食べ物に混つて這入つた爲に、こんなに嘔吐まで催して苦  
んだかと思ひますと、心願のいかに尊く、また難行のいかに難しい  
ものであるかと誨いられましたやうで、俄に敬虔な氣持に打たれて、

實になんとも云へない神々しい心持になつたのでございます。只今でもこの一粒のお米を保存いたしまして、奇蹟の記念といたしてゐるやうな次第でございます。

それから、これも矢張りこの穀断ちをいたしてをりました時のことでございます。穀断ち始めましてから追々日数が経つに連れまして、身體がめつきり衰へてまゐりました。勿論私の心持には何の變りもございませんが、たゞ肉附が衰へてまゐりますので、知り合のお方が、

『米の飯をお絶ちになつたのだから、餛飩なら差間へはありますまい。一日に一度しかお食へにならない上に、米の飯をお絶ちになつては、いくら苦痛が些しもなくとも、身體の肉が落ちてまゐりますから、是非餛飩をお食へになつてごらん下さい。』

と、申されますので、折角の御勧めにしかたなく餛飩を一把買ひ求めまして、先づその半分を煮ようと思ひ、五徳の上に鍋を置きま

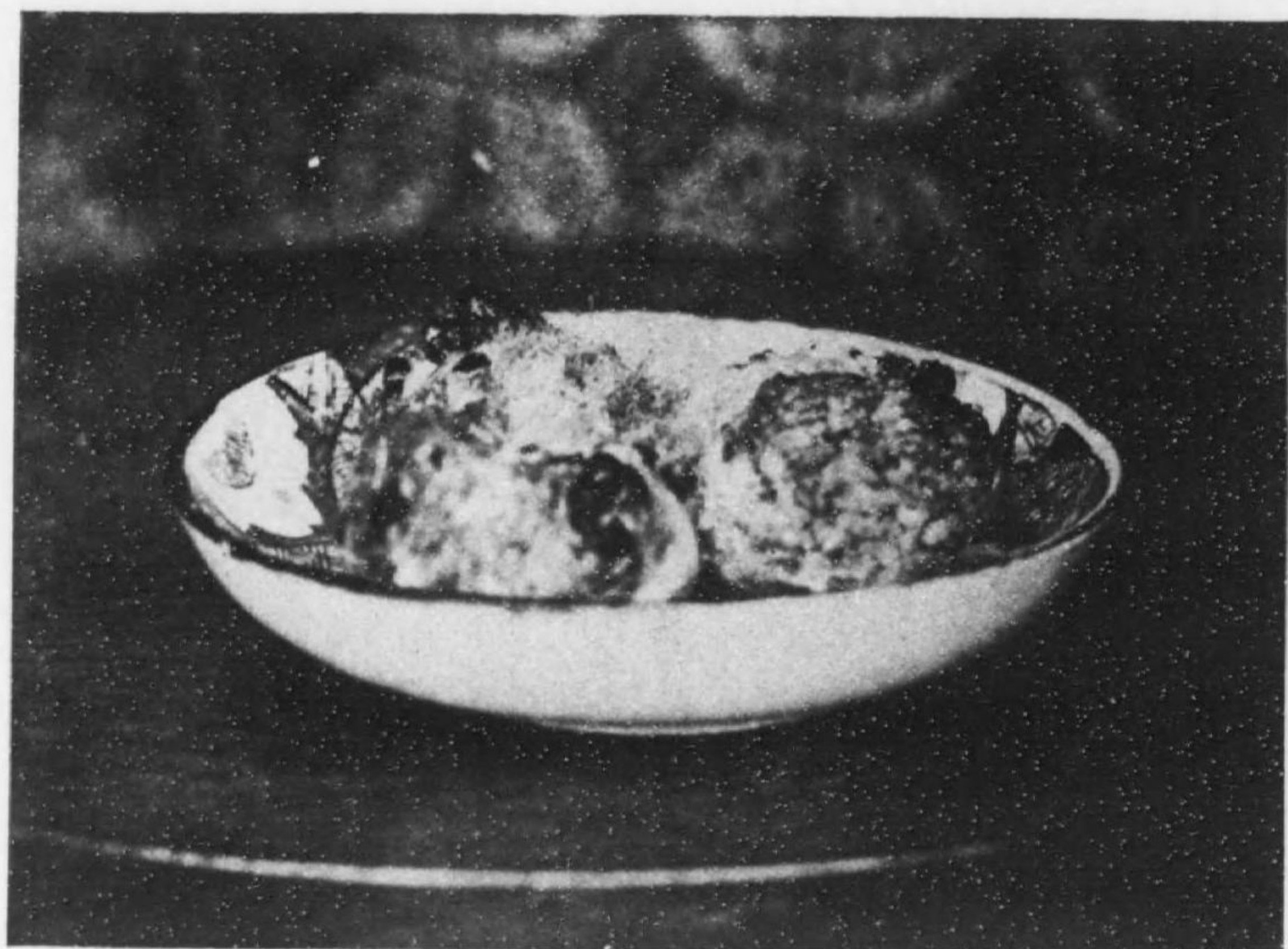
した。するとまだ餛飩も入れないのに、どうした譯か鍋が頻りに動き始めるのでございます。餛飩を入れますどころか、危くて仕様がありませんから、こは茲度穀断ちの心願に背く神意の靈驗だと考へまして、斷然煮ることを中止いたしました。

ところが、其後不圖した時の靈感に、身體の衰弱した時には、その残りの餛飩を用ひてみよと云ふお告げがございましたので、早速以前の残りを取り出して用ひてみますと、僅かその十分の一位の量でも、驚く程氣力を恢復するのでございます。そこで知り會のお方で氣力の衰へた方に差し上げてみますと、私同様忽ち目に見えて衰弱が癒つてまゐりました。殊にこの餛飩は、衰弱が酷ければ酷いほど一層効能がありましたので、思はぬことから飛んだ人助けをいたしました。

◇  
これは大正十一年六月九日のことでございます。前にも申し上げ

ましたやうに、春日明神の例祭は従来毎年五月の九日でございましたが、この年から六月九日に變更されましたので、北海道に在りましても、その心組で何時ものやうに、心許りの赤飯を炊きまして、御神前にお供へいたしますと、恰度それから五日目の十三日の朝でございます。俄に閃きのやうな靈感に襲はれまして、僅か許りではあるが、優曇華の花が屹度咲くと云ふお告げに接しましたので、その日一日は只管お禱りを續けて、さて翌日例に依りまして神前のお下りを押し頂きますと、なんと云ふ奇蹟でございませう、靈感その儘に疑ふ方もない優曇華の花が、僅かながらも立派に咲いてゐるのでございます。實に重ねくの奇瑞に驚いた次第でございますが、よくよく考へてみますと、靈感のありました十三日は恰度日頃私の同じく仰仰いたしてをります、日蓮上人の御命日に當つてをりましたので、一入麻訶不可思議の因縁に愕いた次第でございます。

……寫眞御参照……



この寫眞は大正十  
一年六月九日春日  
明神御例祭當日  
——この年から例祭  
が六月九日に變更  
されました——北海  
道旭川で咲いた優  
美華の花でござい  
ます。この寫眞の中  
には春日明神の御  
姿と三宗神社の御  
姿とが現はれてお  
るでになります。

重ねくゝの奇蹟から不圖思ひつきまして、優曇華の花の咲いたところを寫眞に撮つて置きましたところ、或る日嚴かな靈感がございまして、その寫眞の中に、春日明神のお使ひと、三宗神社のお使ひとが現はれてゐるとのことでございますから、驚いて寫眞を凝視いたしましたすと、なんと云ふ不思議でございますから、寫眞の中にはお告げその儘に、そのお使ひが現はれてお出でになるのでございます。それから、其後東京に出てまゐりました節に、池上の本門寺に参詣いたしましたして、御開帳をお願いいたしましたすと、それは一月一日のことでございますが、夢現の間に白い頭巾をお被りになつた上人がお現れになりました、優曇華の寫眞の中に、思はぬ澤山な神々がお現はれてゐる、と云ふお告げがございましたから、早速寫眞の中を種々と探してみますと、實に次のような各神々のお姿や、お使ひの十二支が現はれてゐたのでございます。



伊勢大神  
 觀世音菩薩  
 聖德太子  
 八幡菩薩  
 弘法大師  
 竹駒神社  
 其他神々の御像並にお使ひの十二支等  
 (この御姿全部は寫眞に就て一々御説明申し上げます)

釋迦如來  
 神武天皇  
 金比羅大權現  
 成田不動  
 お岩稻荷  
 源義經

日蓮上人  
 春日明神  
 三宗神社  
 古武ヶ原神社  
 豊川稻荷

二六

餘りの奇蹟に、それを寫眞に撮りましたところ、更にその寫眞の中  
 中<sup>ま</sup>にまで尊い御靈驗を受けましたと云ふことは實になんと云ふ忝け  
 ないこととございませう。それにこの年は、恰度一番最初に優曇華  
 が咲きましたから、滿七年目に相當いたしますので、重ね々<sup>かさね々</sup>の御  
 禮を申し上げるために、久振りに仙臺に訪れまして、因縁深き御神  
 殿に額き、心ゆくまで御禮の御禱りを捧げたのでございます。大正  
 十一年七月十三日、恰も日蓮上人の御命日でございます。

◇

……寫眞御参照……



この寫眞は大正十  
一年七月十三日最  
初に優美華の花が  
咲きましてから滿  
七年目に相當いた  
しますので重ね重  
ねの御禮に仙臺  
御禮詣りをいたし  
ました時の記念で  
ございます。

旭川に轉住いたしましたし、今迄申し上げましたやうに殆んど極度の信仰生活でございましたので、何處でお聞きになりますか、是非信仰の力で病氣を癒して貰ひたいと云ふお方が、毎日のやうに訪ねてお出になりました。しかし、私の信仰は、前にも申し上げましたやうに、私自身の信仰でございましたから、その信仰の力を賣物にいたさうなどは夢にも思つたことがございません。

それで、折角訪ねてお出でになつても、お氣の毒ながら悉くお断りいたしましたのでございますが、いくらお断り申し上げても、最早醫者にも見放されたのだから、是非信仰の力で助けて貰ひたいと、どうしてもお歸りにならない方がございますのでそれまでに仰せられるのはよく／＼のことゝ考へまして、つひ／＼お氣の毒に思ふことが先に立つて、知らぬ間にお引き受けするやうになるのでございます。ところが、かうして一人のお方をお引き受けいたします

と、他のお方から、あの方だけお引き受けになつて、私達はどうしてお断りになるのですかと申されますので、これには全くホト／＼困り果てゝ了ひました。

そこで、私も種々思案いたしました結果、遂に思ひ諦めまして、私の信仰の力で及ぶ限りはお竭したしたいと決心いたしましたので、それから誰方でもお頼みに應ずることにいたしました。

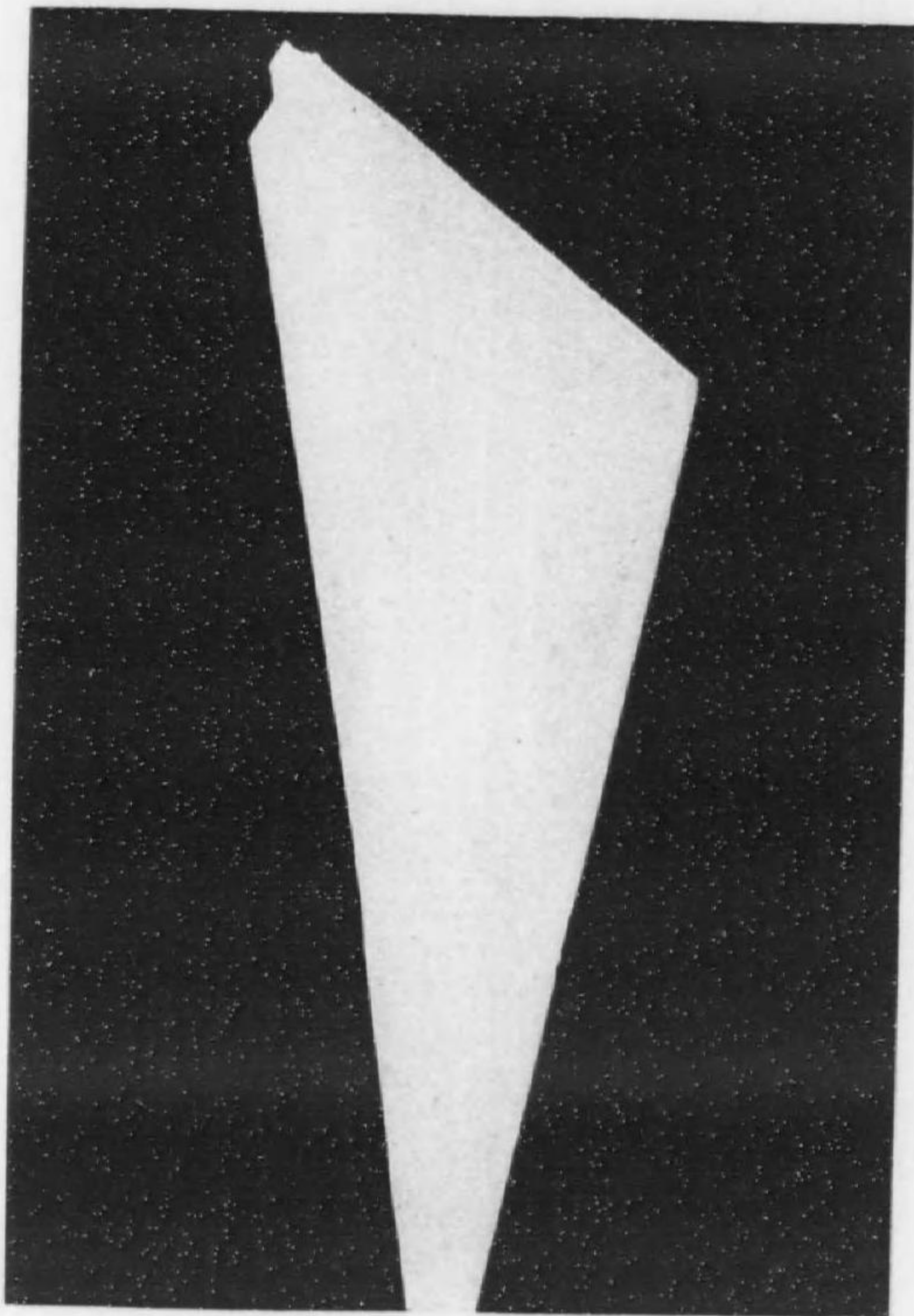
これもその前後のことで、お話しが一寸後戻りになりますが、たしか大正六年の五月頃だと覚えてをります。私の子供が不意に患ひ始めまして、大變にひどい差し込がまゐりまして苦しみますので、なんとかして癒してやりたいと念じてをりますと、俄に靈感がございまして、紙をもつてその痛いところを撫でゝやれ、と云ふお告げでございまして、早速紙をもつてその差し込みのところを撫ではその紙を一々焼き捨てゝをりますと、また急に靈感に接しまして、その紙は焼き捨てるには及ばない、その紙をかう云ふやうに折つて、

その中へかう云ふやうに文字を認めて、それを肌身離さず持つてゐれば、決して患ひを募らせるやうなことはない、と云ふお告げがございまして。

それで、子供の病氣が癒りますと共に、お告げの通りに紙を折りまして、それに文字を認めましたものを、知り合のお方で御難澁の方に差し上げますと、いづれも非常に靈驗のあることが判りまして意外なお欣びを受けましたことがございます。

そこで、只今でもそれを三角お守と稱へまして、引き續き御難澁のお方に差し上げるやうにいたしてをります。

……寫眞御參照……



この寫眞は  
大正五年五  
月、北海道  
旭川で偶然  
感によつて  
紙の折方  
字の認め  
方を授かり  
ました三角  
お待たさ  
いませ。

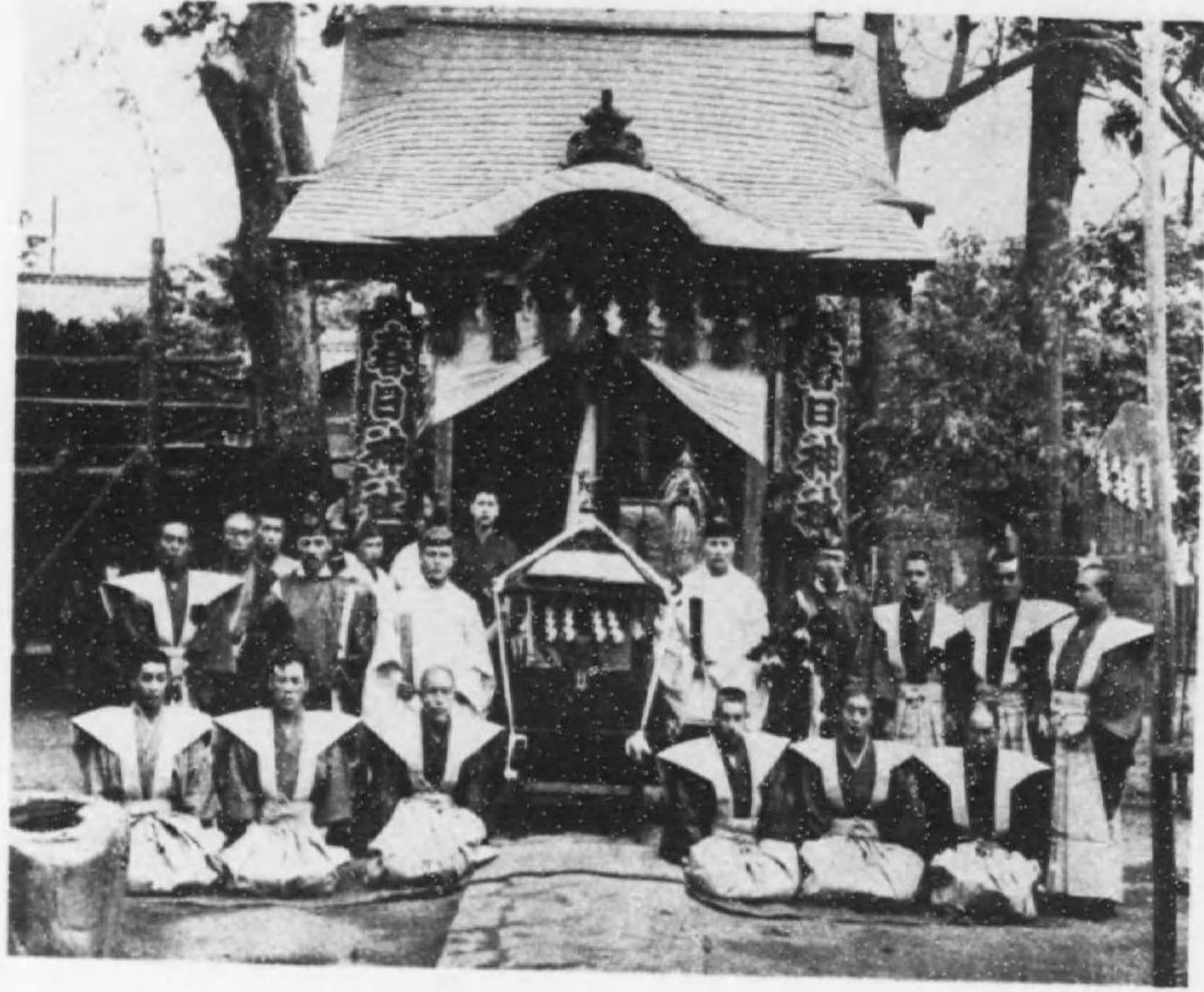
◇  
ゆくりなくも私の信仰から、遂に人様の御病氣や煩悶までお引き受けして、私の食を断つてまでお禱りするやうになりましたが、もと／＼私の信仰は私の幼い時からの信仰でございまして、この信仰の力を賣物にいたさうなどは、それこそ夢にも考へたことはございません。それで、どなたがお出でになりましたも、曾て謝禮を頂いたこともございませんが、こゝに洵に困りますことは、餘り多勢のお方がお見へになりますので、勢ひ法律上無免許ではお禱りすることが出来なくなつたこととでございす。しかし今更決心いたしましたことでございすから、己を得ず神道教會に申し出でまして、愈々公式の免狀を頂戴いたしましたやうな次第でございす。  
それでこれからは一層精進潔齋いたしましたして、微力ながら私の信仰の力をおもちまして、亂れた思想界を多少にても清めたいと心掛けてをります。また醫者に見放された御病人や、人にも言へない苦し

い患を持つてゐられるお方を、我一身を犠牲にいたしまして、一生懸命にお救ひしたいと念じてをります。そのために若し私の手に金銭を受けとすやうなことがございますれば、それは悉く淨財といたしまして、神社佛閣の御費用に一切を寄進いたしたいと考へてをります。

それから最後に申し上げて置きたいと存じますのは、最初に申し上げましたやうな不思議な奇縁で、春日明神の御神體を御奉還するやうになりましたが、この不思議な機縁から、私は勿論数々の御靈感を頂いてをりますが、それよりもなほ喜ばしいことは、八年前迄は見る影もなく寂れてをりました春日明神が、只今では追々に氏子が殖へてまゐりまして、私などが出向きますまでもなく、年々立派な祭典が催されるやうになつたことでございます。

氏子の方々から贈られました儘に、御参考迄に最後にこの寫眞をお添へいたしてをきます。

…寫眞御参照…



この宮儀は私が不  
思議な奇縁から奉  
目明神の御神體を  
御奉還いたしましたし  
たゞ、只今では昔  
のように毎年この  
宮儀のごとく立派  
な祭が営まれてゐ  
るのでございます



それから、今一つ申し上げて置きたいと存じますのは、右の寫眞  
◇  
（氏子方から贈られました寫眞）の中に、二十餘年前、御視殿の中  
から勝手に御神像を持ち出した、興行師の方が血に染つて現はれて  
ゐることでございます。さうして私の感じました靈感に、「どうか私  
（興行師のこと）の供養をして下さい」と云ふ頼みがありました  
から、私もすでに亡くなられて前非を悔てゐられることでございます  
まから、近く機を見まして供養を営みたいと考へてをります次第で  
ございます。

大正十二年十一月二十八日納本  
大正十二年十二月一日發行

非賣品

北海道旭川市三條通二丁目左八號

著者兼 發行者 餘 目 リ エ

東京市小石川區久堅町百八番地

印刷者 柳 原 正

東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所 株式會社 博文館印刷所

東京市牛込區香町三十三番地

扶桑教祈禱所

發行所



不許複製

307  
264

終

